

巻頭言

山梨県立中央病院 病理科 小山 敏雄

第30回山梨肺癌研究会の世話人をお引き受けした際に、前回はちょうどその半分の第15回のときに世話人を引き受けさせて頂いたことを確認し、15年もの間年2回滞ることなくこの会が続いてきたのだなと感慨にふけりました。継続とは一言でいえば簡単なことですが、実際には大変なことです。会員の熱意がその源と申せましょう。特に、事務局の吉井先生におかれましては、一時の危機的な財政の中でも医局から資金を借入するなど、飄然とその危機を乗り越えられたことに敬意を表します。

今回は9題の一般演題が集まり、活発な討論が行われました。特に、国療富士病院の石原先生の演題は医の原点をもう一度見つめ直すべく教訓的でありました。特別講演には東大病理学教室から仁木利郎先生をお呼びし、間質のもつ重要性について御教示頂きました。とかく癌細胞のみに注目しがちな風潮の中で、間質に着目することはきわめて意義のあることです。仁木先生の言われたように間質はいわば土壌であります。土壌はそれが繁殖する植物によっても変化を受けます。一癌細胞と間質は常に相互作用によって成り立っている— いくらDNAチップが癌の特性を描出する時代がきても、間質との相互作用を無視しては十分な癌の理解にはつながりません。実際の病理診断の場面においてもこれは重要なことで、野口分類のB型とC型の癌細胞は形態学的に区別がつかなくても、間質を異にする限り必ず違った性質を持っています。野口先生によれば、周囲の肺泡置換型の部分でも両者は違っている可能性があります。今後はこういったことも視野にいれて、肺癌の診断・治療の研究を押し進めていかなければなりません。

1999年にはWHOの肺・胸膜腫瘍と胸腺腫瘍の新組織分類（ブルーブック）が次々出版されました。これを受けて肺癌取り扱い規約も大きく変わります。病理診断のみならず、それを受けて治療する立場の人にとっても新時代の到来です。いわば、胸部腫瘍新世紀と言えましょう。